

旧中山家住宅
きゅうなかやまけしゅうたく
倉敷市

ゆらぎのあるガラス越しに庭を望める母屋の空間。現在は、すべての建具が開放たれ、大空間となっている。

後世へ伝えたい、
旧邸宅。



城壁造成専門の土木技師の指導の下で築造された石垣。工期中は石材を運ぶ列が港まで続いていたとも。



京都から呼び寄せた棟梁と地元の大工たちが、伝統的な日本建築の造りに当時の最先端の技術を取り入れて手がけた入母屋造の母屋には、近代和風建築の流れが垣間見える。良材を用い、そここに上質な造作を施してあり、かつて迎賓館としても利用されていた。晩年には帰郷し、この屋敷に住んだ説太郎。当時難航していた水島工業地帯への企業誘致に尽力したとも伝わる。

連島が誇る実業家が母の思いをかなえるべく建てた、壮大な屋敷。
倉敷市連島の町並みを見下ろす高台に築かれた石垣の上に、長大な長屋門や母屋、離れ、複数の蔵などを擁する『旧中山家住宅』。当邸を建てたのは、連島西之浦出身の中山説太郎。大阪鉄工所（現日立造船）や久原鉱業（現ENEOS）、日魯漁業（現マルハニチロ）の役員を歴任した、明治から昭和にかけて活躍した実業家だ。「お城みたいな家に住んでみたい」という母の思いをかなえるため、一九一九年（大正八年）から一〇年の歳月をかけて完成させたものだという。

小学校卒業後に連島を離れ上阪した中山説太郎。大阪商業学校卒業後、頭角を表した久原財閥で大番頭として腕を振るった。





右から、山陽瓦代表取締役の石井二郎さん、中山家現当主の中山幹朗さん、当邸の近くで農園を営んでもいる三宅宏男さん



桁行27mに及び長大な長屋門。総けやき造り・なまこ壁の表門は、城門を思わせる風格ある佇まい。



(右) 母屋と離れを結ぶ渡り廊下は、曲面天井に。
(左) 格天井やけやきの式台に格式漂う母屋の玄関。



花台は、久原家が皇室から譲り受けていた品で、皇族が当邸を訪れることを知り、説太郎に譲ったのだとか。

生し、地域の皆さんに活用していただき、後世に残そう」という誓いを立て、保存会を発足。以降、当邸の修復に並々なぬ覚悟を持つ石井さんは、屋根瓦の吹き替えや家屋の修繕などをすべて自費で行なってきた。いっぽうで「人が集まることがこの地の活性化の一助になれば」と、保存会では寄席やマルシェなどイベントも開催。保存活用への熱き思いによって新たな時を刻み始めたこの邸宅。ぜひ足を運んでみてほしい。

「再生し、活用し、地域活性化の一助に」と保存利活用に挑む。

「旧中山家住宅」は、昨年三月から一般公開されている。発端は、二〇一六年に中山説太郎の孫である幹朗さんが、神社仏閣などの修復工事も手がける瓦会社の代表・石井二郎さんから受けたこんな忠告。「このままでは廃墟になる。保存すべき貴重な建造物だから修復したほうがよい」。同じ頃、当邸を調査した建築家の中村陽二さんから「文化財として残しては」との提言も。それから間もなく、中山さんと現所有者の三宅宏男さん、石井さんの三人は、「再



高さ10mを超える石垣。連島石が用いられていると考えられていたが、最近、北木島産であることが判明した。



旧中山家住宅

倉敷市連島町西之浦295
☎090-6839-7737 (旧中山家住宅保存会)
🕒10:00~16:00 (入館は~15:30) 🌞月~金曜 (祝日の場合は開館) 🍷高校生以上500円 🍷50台
<http://nakayama.com/>

東京から招かれた庭師が作庭した池庭。かつて配されていた茶室と東屋はないが、多数の灯笼は現存する。



(右) 離れの北側に並び建つ中蔵と米蔵。建築当初は白漆喰だったが、戦時中の灯火管制の際に黒く塗られた。(左) 右手奥が母屋、左手は居住部分と内蔵が一体となった離れ。時に、客人の宿泊や打ち合わせの間の場としても使われていた。

